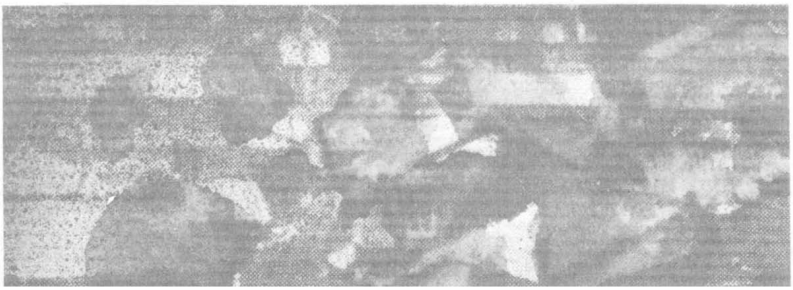
秋月へ

丸元淑生

秋月へ

丸元淑生



秋月へ

九八〇円

©一九八〇

昭和五十五年二月十日初版印刷
昭和五十五年二月二十日初版発行

著者　丸元淑生

発行者　高梨茂

印刷　三晃印刷
製本　小泉製本

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―八―七
電話　五六一―五九二一
振替　東京二―三四

検印廃止

目次

秋月へ　5
贈物　137
光にみちたあたたかい場所　171

装幀

谷口茂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

秋

月

へ

おお、主よ、個々に固有の死を与えたまえ
それぞれがそこに、愛と意義と苦しみとをもった生のなかから
生まれ出る死を

リルケ『時禱詩集』貧困と死の巻より

秋月へ

明治の警察が、いつの頃まで秋月の乱の残党の追及をつづけていたのか、私は知らない。その人の写真は――写真だったのか、写真の上から修正を加えた肖像画だったのか、確めたことはなかったが――蒲団に入って目を開けていると、いつも不思議な柔和さで私を見おろしてくるのだった。

異様なのはその風体で、一見すると神主だったが、よく見ていると歴史絵本に出てくる日本武尊や神武天皇の身なりに近いのだった。神主の冠に似た帽子をかぶり、日本武尊が身につけている曲玉や管玉のたくさんついた首飾りに似たものをつけていて、それが胸いっぱいの勲章のようにさがっていた。そして、何というのかよく知らないが、祭壇にすすみ出るときに神主が捧げも

つ笏によく似た板ぎれを、やはり持っているのだった。
だから、私は、まだ小さかった頃、祖母によく尋ねたものだ。
「あの人は神さまね？」
「いいえ、あの人はあんたのひい祖父ちゃんばい」
「神さまじゃないと？」
「わからんかねえ、なんぼいうても、この前もひい祖父ちゃんばい、ちいうたじゃないね」
「そんならなし、神さまの恰好しちょるとね？」
そういって、祖母を困らせるのが、私は好きだった。
「あれは、神さまの着なさる着物じゃないとよ、神さまは着物なんか着なさらんでええと、神主さんの着なさる着物よ、あんた神主さんは知っちょるじゃろうがね」
「そんなら、ひい祖父ちゃんは神主さんじゃったと？」
「……」
その先になると、祖母はいつも口をつぐんだ。
秋月の乱を起こして、まだ稚なかった祖母を背負って逃げたという、その母方の曾祖父は、いつの頃まで追われていたのだろう？　神主でなければ何になっていたのだろうか？　祖母に聞いてもその点は、さっぱり要領を得なかった。私は、田川の後藤寺という町の母の実家で、明日か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

らはじまる学校のことを考えていた。戦争が終って、まだ半月しかたっていなかった。

その町の上に、いく層にもたなびいているように思える煤煙は、夕方になると霧雨のようにゆっくり降りてきた。だから、洗たく物をとり入れるのは、まだ日の高いうちにしなくてはならなかった。とり入れを忘れた洗たく物の上には、触ると指が黒くなるくらい煤がのっていたのだから、ひそかに黄昏を告げるように煤煙が降りてくるとき、霧雨の音を感じさせて不思議はなかった。その頃になると、あちこちの家から鼻を刺すようなたどんの匂いがただよってきた。私がV字型の峡谷と呼んでいた家の脇の狭い路地を下って裏通りに出る手前には、いつも馬がつながれていたけれども、黄昏どきには、馬がいる日といない日があった。朝早く荷車をひいて出ていく馬が、夕方になって帰ってくる時刻は、日によってまちまちだった。いつ見てもおとなしくしている痩せこけた馬の丸い大きな目に映っていたのは、家の境の煤けた板塀と、そこから見える便所の屋根と、その脇に枝をのぞかせていた一本の柘榴の他は、鉛色をした煤煙の空だったとしか思えない。

母と妹は、一家が南九州の延岡で焼け出されてこの町に逃れてきて、さらに、この町からも逃れて、一時身を寄せていた近くの村の農家にまだ残っていた。兄は中学に通うために、中学のある近くの町の、知りあいの家に寄宿していた。

この町で、私が日課の第一として始めたことは、柘榴の枝と板塀の上に渡した物干竿から、背の低い祖母が洗たく物をとり入れるのを助けて、竿をもちあげていることだった。

私は祖母が好きだった。それは、彼女がいつも老いた赤犬のように見えたからで、その頬を「犬、犬」と、いってつかむのがたのしかったからだ。祖母の頬は犬のように垂れていたから、つい手を出してつかみたくなった。すると、祖母は、何をされても文句をいわない犬のように、黙って私の好きなだけ、触らさせてくれるのだった。祖母の歳は七十三か四のはずだったが、白髪はほとんどなくて、（ときどき白髪を抜いている彼女を見かけることはあったけれども）ひっつめにした髪をまげに結い、下のほうで一つにまとめていた。べたんとなでつけられた髪が、彼女のどことなく可憐な感じのする頭の輪郭を描き出していて、その少し広すぎるくらいの額が、老いと同時に幼女のような稚なさを与えていた。彼女の近くに寄ると、いつも椿油だか香油だかの香りがただよっていたのだが、きちんと櫛の目の通っている堅く結われた前髪にくらべると、襟足のあたりの髪にはゆるみがあって、それで、小さな鳥の巣のようなふくらみができているのを見るたびに、私は一種の愛しさを感じた。祖母が着ていたのは、唐桟（とうざん）の縞織の単衣で、濃い藍の地に、一見墨に見える濃い藍の棒縞が走っているその着物を、まるで一張羅のようにしている彼女を、私はいつも家の中に感じていることができたし、ふと忘れていることもできた。

彼女が人と話すときのことばは、私には奇異なものだった。道ばたで知った人に出会うと、祖

母は必ず、「ごりょんさん」と呼びかけた。やがて私にも「ごりょんさん」が貴人に対する呼称の「ご寮さん」であることは知ることができたけれども、彼女がきまって語尾に加えた「そうかな、むし」だけは意味不明のままだった。それは、「そうかな、もし」ともとれないことはなかったが、むしろ「そうか、なむし」に聞こえることのほうが多かった。だから、私は、「ばあちゃん、なむしちゅうのは、まむしのことね？」と、きいたことがあった。すると、祖母は、「まむしじゃないとよ、そうかなもし、ばい、そうですか、ちゅうて人の話を聞くときに、使うことばやが」と、教えてくれたのだが、「なもし」だとしても、それをひんぱんに語尾につける話し方をしている人は、この地方では祖母の他にはあまりなかった。それは、（祖母の説明によると）彼女が学校に行けなかったからで、読み書きを曾祖父に教わったからなのだった。秋月を出たのは、祖母が数えの六歳のときで、村の寺子屋で読み書きを習いはじめたばかりだったそうだが、それ以後は、とうとう正規の学校には行けないままに終ったというのだ。

「ばあちゃんは、学校に行けんやったとやき、あんたのひい祖父ちゃんにことばを習うたきね古いことばしか知らんとたい、ひい祖父ちゃんは礼儀の正しい人やったき、ことばには厳しかったとよ」というときの祖母は、一種の誇りも見せてはいたが、同時に寂しそうで、学校に行けなかったことを悔んでいた。「寺子屋では、うちはいちばんできよったんばい」とも、彼女はよくいっていた。そして、そのときの祖母の目からは、いつもの柔和さは消えていた。遠いものを見る

目差のなかに、獣じみた――少し離れた位置からこちらを見つめて来るときの犬や熊の目に似た――たけだけしい怒りの色が滲んでいて、普段は黒々と見える彼女の瞳が、赤茶色に見えた。

私は理科が好きで、天文学者になるのが夢だった。空襲で焼け出されるまでは、父の本棚から、父の大学時代の、物理学のノートや本をもち出して読んでいたくらいだったから、彼女が寺子屋で一番だったと聞かされても感心する気にはなれなかったし、その赤茶色の目を見るたびに私に生まれてくるものは、祖母に対する憐憫でしかなかった。

だが、私が彼女に惹かれるのは（その度にいらいらしながらだったが）、まれに見せることのあるその獣じみた目の色にだった。秋月の乱のために彼女が学校に行けなかったように、戦争は私にとっても学校らしい学校をなくさせていたし、やはり彼女の味わったと同じ流浪の境涯に似たものを、与えてくれていたからなのかも知れない。祖母の母親、つまり私にとっての曾祖母は、祖母を出産した際に死亡していた。男児を希望していたのに、生まれた子が女だと知らされて、失望のあまり死んでしまったのだという、嘘だか本当だかわからないような話が伝わっていたけれども、死んだその母の菊代という名をとって、祖母の名は菊乃とついていた。曾祖父が秋月の乱に加わって戦いに敗れたとき、この一人娘が、ようやく寺子屋に通いはじめたばかりの年頃だったとすれば、その子を置いては逃げることができずに背負って逃げたのだろう。その昔話を聞くたびに、私の脳裏に浮かんでくるのは、夜の闇にかくれて家に戻った曾祖父が、祖母を背負っ

て暗い夜の道を、藪かげにかくれたり、田の畔に身をひそめたりしながら、村から抜け出ていく姿だった。それ以来、曾祖父は秋月に帰ることはなかったらしく墓も秋月にはなく、この後藤寺にできていた。

私はまだ、あの戦争の恐怖から抜け出ることができないでいた。何度も死と向きあったあとで、ほとんど燃え尽きてしまったほどに思える生命が、それ以来何も起こらない日常のなかで一日一日伸びていくその時間は、私には信じられないものだった。世の中は大きく変わっていっているようだったが、新しいものも古いもの同様、信じることはできなかった。祖母と一緒にいるときが、私にはいちばん信じられる時間だった。

もう一つ、祖母のことばで最初なんのことだかわからなかったものに「こつぼ」があった。それが家の小さな庭を指すことばとわかっても、なぜ庭のことを「つぼ」というのかわからなかった。辞書を引いてみて、中庭のことを「つぼ」ということがわかったのだが、家の庭はたとえそれに「小(こ)」という形容詞をつけたにしても中庭と呼ぶにはあまりにも狭く、「小壺」と誤解していたほうが、むしろぴったりだった。そこには、誕生を過ぎたばかりの私が這って行って縁から転がりこんだという小さな池があった。一月か二月の厳寒の時期で、池には氷が張っていたというのだが、泣き声に気づいて行ってみると、私が破れた氷から首を出し、手をばたばたやっていたので驚いたという、それくらいに浅い、盥のような池なのだった。池のふちには、つつじと、

松と、その奥に一本のやぶ椿が植わっていたが、庭全体が一個の盆栽のような感じだった。池のうしろには、さまざまな形をした小石が小高く積んであり、その築山の中に、やはり小石を積み重ねて作った六重にも、七重にもなっている塔や、燈籠が建っていた。燈籠の根かたの小石が苔むしているあたりには、薬草にするためのきじん草が一面に生えていた。怪我をしたり、腫れものができたりしたときには、わが家ではまず何をおいてもこのきじん草の葉の揉み汁が処方されたから、延岡の家にも庭の片隅の日の当らない場所に生えていたけれども、それは、このきじん草を何本か抜いていって植えたものだった。だから、こちらのほうが本家なだけに、延岡の日蔭に生えていたのとは、比較にならないほど見事なものだった。葉ぶりも色艶も、きじん草の主のようで、深い緑の茎に、赤紫の筋をにじませ、延岡にあったものの二倍くらいの大きさの葉を池のふちにひろげていた。もっともそれは、あまり自慢できることではなくて、ただ庭が日の射さない暗い場所であることの証明だった。

この家は玄関に二畳の間があり、入ってすぐの右手が台所につながる板の間になっていた。広さは六畳に少し欠ける方形をしていて、路地の側に小窓が開いていた。池に面した側にもガラス戸がついていたのだが、そこはもう長いことしまったままだった。その板の間で私たちは、各人のお膳を持ち出して食事をするきまりだった。食事がすむと、やはり各人の箸箱に箸をしまうのだが、みんなが、箸を洗わずにただ舐めるだけでしまっているのを見ると、不潔に思えてならな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.